地域情報研究：立命館大学地域情報研究所紀要
Journal of Regional Information and Development
The Research and Development Institute of Regional Information, Ritsumeikan University:
13-113-119 (2024)

■研究ノート

再現構造分析の提案
ー自殺に向かいあう文化と心を考えるために

川野　健治 *

【要旨】
日本文化に固有な自殺の捉え方はいかに概念化し把握することができるだろうか。本稿では、日本で長く親しまれてきた文芸作品など文化産物での創意（作者や演出者らが、時々の作品において作品に施した工夫）の変動・変遷を分析することで心と文化の相互構成過程を推量する手法として、再現構造分析を提案する。

キーワード：自殺、再現構造分析、文化産物、曽根崎心中

Ⅰ．はじめに

自殺対策大綱に基づく健康対策と経済対策を柱とする地域づくりを背景に、我が国の自殺死亡率は2011年以降順調に低下し、2019年頃には「10万人対で16人程度」にまで戻っている。戦後にこれを下回ったことはなく、この水準でも日本の自殺死亡率は他国に比して高い。このことから、経済状況の変動や国をあげての自殺対策下でも、なんらかの要因で維持されている基層的な部分があり、ここに日本固有の課題があると考えられる。2020年にはcovid-19の影響で自殺死亡率は増加傾向に転じており、これに応じて、2021年度以降は心理学だけでなく、公衆衛生、精神医学、保健学の専門各誌が自殺対策の特集を組んで総括している。今、日本の自殺対策は新たな視点が求められている。

自殺死亡率が一定の値に回帰する背景に、社会制度や文化など通時的に安定した要因の影響が推測できる。White（2012）は、従来の医学的、生物学的な自殺モデルには限界があると批判し、Critical Suicidologyを提唱した。たとえば、多くの先進国で実施されている匿名の自殺予防電話相談が、カナダ北部のイヌイットの人々に利用されなかったのは、「ケアは親密な関係の中で行う」という文化に沿わなかったためである。このように、固有の社会文化的コンテクストに焦点を当てる自殺理解は、自殺予防学における文化的転回（Bantjes & Swartz, 2017）、あるいは「Indigenous Suicide 固有文化の自殺」予防（White, 2012）として新たな研究・実践の潮流になっているが、上述の特集ではほとんど言及がみられない。

ところで海外の関連学会では「日本は自殺への偏見が強く、同時にハラキリ、カミカゼなどの自決の慣習やそれを文楽などの大衆文化として楽しんできた歴史がある奇妙な社会である。これが日本の自殺死亡率の高さに影響しているのではないか」と指摘されることがある。この言説には（1）日本では本来は自殺を忌避していること、（2）自殺が多い社会

* 立命館大学総合心理学部　教授

に適合するように、大衆文化を通して文化と心を相互構成してきた歴史があること、そして、(3) 自殺を許容する文化を有することで、自殺を促進するかあるいは自殺対策を抑制する効果がみられることが含意されている。ここに焦点を当てることで、日本における自殺に対しての理解を進めてみたい。

Ⅱ. 再現構造分析とは

日本文化に固有な自殺の捉え方があるとして、それはいかに概念化し把握することができるだろうか。本稿では、日本で長く親しまれてきた文芸作品など文化産物での創意（作者や演出者らが、時々の作品において作品に施した工夫）の変動・変遷を分析することで心と文化の相互構成過程を推量することを提案する。例えば曽根崎心中は、江戸時代に近松門左衛門が作品化して以降、それぞれの時代において工夫を加えられながら、結果的には300年以上もの間、私たちの社会において物語の形式で受け入れられてきた。言い換えると、作り手は心中という現象を日本人が承認可能な物語として繰り返し表現（＝再現）してきたのである。この創意の変動・変遷を把握するために文化産物を収集し、ディスコース分析によってその特徴を明らかにするアプローチを、本稿では再現構造分析と呼ぶことにする。

グッドマン（2017）は絵や彫刻を記号としたときに、指示する対象が実在しないシステムを指摘している。たとえば、ユニコーンの絵や彫刻は多数存在するが、ユニコーンそれ自体が実在するわけではない。ここでこれらの作品は、実在物を指示するがゆえに記号なのではなく、ユニコーンの絵というジャンルに属する（ことによって実在しないユニコーンを指示する）という意味で、ユニコーンの記号なのである。それらの記号間にどのような異同があり、また全体としてどのような集合を形成しているのか。再現構造分析はここに焦点を当てていることになる。したがって、再現構造分析の目的は先述のような言説を仮説と捉えて真偽を問うことではない。

なお、自殺についての固有文化心理学（Kim & Berry, 1993）研究と考えるなら、日本の固有文化の自殺概念を海外に発信し、既存のWEIRDを前提に発展した従来の自殺予防の理論とのconsilienceも課題である。

Ⅲ. 方法

再現構造分析の題材として本稿で取り上げるのは、曽根崎心中である。これは、元禄16年（1703）旧暦の四月七日に起こった実際の心中事件をもとに、近松門左衛門が人形浄瑠璃（文楽）として作品化し、同年五月七日に初日上演が行われたとされている。今日に至るまで、文楽、歌舞伎、映画、小説、漫画等多様な形式で上演されてきた。本報告では、作品間の比較のために近松の脚本のほかに、文楽（野沢、1995）、文楽（杉本、2012）を、また同時期の比較対象として、小説（角田、2012）をとりあげた。

この間の手順は以下のとおりである。

① タイトル（作品群に共通する呼称、本稿の場合は「曽根崎心中」）の選択　再現構造分析が前提としているのは、作者らの創意がその時代の社会に受け入れられる工夫

となっていたことである。これは直接確認することはできないので、作品群を通して長く親しまれてきたこと、あるいは多くの人々に支持されたことをもって、いわば「淘汰」されずに社会に適応した証とみなしている。たとえば日本の文化に織り込まれてきたものとしての自殺を分析の焦点とするならば、これを重要なテーマとして位置付けており、かつ、長い期間にわたって支持されてきたタイトルを選ぶ必要がある。したがって、曽根崎心中のほかにも、山椒大夫、忠臣蔵などを候補とすることができる。

② 分析する言説の選択　次に、同じタイトルの多くのバリエーションの中から、分析する作品を選択する必要がある。再現された言説間の異同に着目するのであれば、比較可能な作品群を選ぶべきだろう。たとえば曽根崎心中の場合は、文楽以外に歌舞伎や映画、文学作品、漫画等として表現されてきており、すべてを取り上げることはできない。そこで目的に応じて選ぶことになる。長く日本社会において親しまれ、文化として根付いたものとして明らかにするのなら、たとえば歌舞伎に限定して異なる時代での上演の仕方（戯曲）を比較する。形態を歌舞伎に限定したことで、登場人物、台詞、幕数などの変化を観察することができる。一方、生業や地域特性による違いを知るために、同時代の異なる形式での作品間での表現の違いを検討することも興味深い。ただしいずれも、作品が分析可能な形で保管されていることが条件であり、同時代の地歌舞伎を対象にすることは興味深いが、資料の収集は困難が予想される。

③ ディスコース分析　分析の基本方針は、各作品の中で分析の焦点に触れている表現を取り出し、それらがどのような意味を提示しているか（指標性）について相互に比較して異同を明らかにしつつ、全体像（記号の集合）を把握することである。本稿であれば作品中で自殺や死について描いた場面を選び、その言説を抜き出していく。戯曲や文章などは時系列の情報処理に適した記号であり、幕や章によって、構造化されている。同じタイトルであれば、幕数や章建てが共通していることが多いので、それを単位に表現の違いを比較することができる。また、幕や章の省略や追加、またそれらの順序が変化することも注目できる。なお、歴史的な変遷をみるならば、できるだけ古い作品を選んで基本スクリプトと位置づけ、それとの差異をとりあげることになる。曽根崎心中の場合は、近松門左衛門の脚本を基本スクリプトと置くことが適切と考えられるが、さらに、これは実際にあった心中事件をもとに描かれたといわれていることから、基本スクリプト自体の創意も検討することが可能である。

Ⅳ．結果

各作品の創意を一覧できるように表にまとめた（表 1）。まず基本スクリプトと定めた近松版の脚本において、元となっている事件に付け足した場面がある。一つは観音巡りの場面であり、主人公である遊女のお初が信心していることが提示される。また、ここでの「色で導き、情けで教え、恋を菩提の橋となし、渡して救う、観世音」という口上は、この時点では直接的に死を示す表現はないものの、恋愛と信心を結びつけていることで、心中を

表１　各作品における創意

事件 （1703年4月）		×	しょうゆ屋手代徳兵衛の縁談話しと遊女お初の身請け話	×	天神の森で心中 （それまでのように畑や墓地でなく）
文楽　近松版脚本 （1703年5月）		**観音巡り（口上のみ）** 神聖化 お初が三十三の札所を巡る 「色で導き、情けで教え、恋を菩提の橋となし、渡して救う、観世音」	**生玉社前の場** 状況説明。徳兵衛縁談話、友人九平次に銀を騙し取られ、殴られた。お初身請け話。 「明くる七日、この銀がなければ、我らも死なねばならぬ」	**天満屋の場** 正当化 店でお初はうちかけの裾に徳兵衛を隠す。お互いの死ぬ覚悟を確認し、深夜二人で抜け出す。 「死んで恥を雪（そが）いでは」 「死に行く身を喜びし、あはれさ、つらさ、あさましさ」	**道行** 栄光化 新地を出て曽根崎の森に向かう。 「後の世もなほしも一つ蓮ぞやと」 「今はの苦患（くげん）にて、死に姿見苦しと言はれんも口惜し」「恋の手本となりにけり」
文楽　野沢改訂版 上演（1955）		× （わかりにくい、場が持たない）	台詞の省略（わかりにくい、場が持たない）	希薄化	希薄化 心中場面は短くなる。演奏のみの場合もある。 恋の手本となりにけりは「森の雫と散りにけり」に変更される
文楽　杉本文楽 上演（2012）	神聖化 演奏（鎮魂歌）	神聖化 花道、仏像、鳥居の舞台でお初の信心	生玉社前、天満屋、道行のいずれも近松版の台詞に戻す。		心中場面の余韻を残す。同じ脇差しで死ぬ場面は、異なる刃物に変更
小説　角田 （2012）	心中についての遊女たちの噂話	モデルとしての先輩遊女を設定 「恋のために死ねるなら」	（全編を通じて死にたい気持ちと視野狭窄）	母性暗喩 うちかけの裾に隠す→闇を抜け→橋を渡って新地の外へ→曽根崎天神の森→徳兵衛を子ども扱い（胎内のメタファ？） 「そうすりゃ全部まるくおさまる」	「遠くで、子どもがなくような真っすぐな声が聞こえる。子どもじゃない、徳さまが泣いている。泣かないで、眼を閉じないで、さあ徳さま、一緒に行こう」（恋の手本…の台詞は省略）

穢れたものではないとする「神聖化」の創意といえる。さらに、天満屋の場も付け足された場面だが、「死んで恥を雪（そが）いでは」「死に行く身を喜びし、あはれさ、つらさ、あさましさ」とあるように、死によって達成できることとして、借金の濡れ衣を晴らし、二人が恋を成就することができることを示している。行動の理由を示してその「正当性」を与える創意であるといえる。最後に道行の場においては、心中の場所として曾根崎天神を選ぶ。ただしこれは、近松の創意ではなく、実際の事件が天神の森で起こっており、それまで畑や墓地など人目のつかないところで行われていた心中が戯曲として取り上げられた要点であったと、伝えられている。近松版では「恋の手本となりにけり」との口上を入れ、観音巡りの場の神聖化とも呼応する形になって、これはむしろ見習うべきモデルであるという「栄光化」の創意であるといえる。なお、この文楽の上演後に、心中事件が多数発生し、心中ものの上演が江戸幕府によって中止されたと伝えられている。

ところが、次に取り上げた野沢改訂版文楽（1955）では、観音巡りの場が省略され、他の場面でも多くの台詞が簡略化された。特に、道行の場では、心中場面の時間は短くなり、あるいは演奏のみとなって詳細が演じられなくなる。「恋の手本となりにけり」も「森の雫とちりに」けりに変更されており、近松版の創意として見出された神聖化と栄光化は、弱まっている。時を経てわかりやすさが求められ、また死の場面を「希薄化」したことによって、当時の人々に受け入れやすくなっていたと推測される。

しかし、さらに時間が経った杉本文楽（2012）においては、希薄化は強まっていない。むしろ、この作品では観音巡りの場を復活させ、さらにその前に鎮魂歌を演奏する場を加えており、再び「神聖化」の創意を見出すことができるのである。舞台には近松版ではなかった本物の仏像が備えられ、お初の信心の様子が印象に残る演出がなされている。

一方、この杉本文楽と同時期に、近松文楽を原作として曽根崎心中の小説が出版されている（角田、2012）。ここでも観音巡りの場面があり、さらにその前の章が設定されていた。ただしこの冒頭の章では、遊女たちの身近に心中事例があること、そのことが遊女達に与える影響について、遊女たちの対話とお初の独り言を通して示されており、この点で杉本文楽とは異なる創意を用いている。心中のお手本となるような先輩遊女が描かれており、またそれほど明示的ではないが、お初のトラウマを扱っているようでもある。さらに小説の後半では、お初が徳兵衛を子どもとみなして庇い、慰め、そして心中へと促している。こちらは神聖化というよりも、ジェンダー、あるいは「母性暗喩」による、心中の物語化がなされているといえるかもしれない。

Ⅴ．今後の課題

以上のように、事件に神聖との関わりを見出し戯曲化するに際して、神聖化、正当化、栄光化という創意が確認できる曾根崎心中では、その後、希薄化、あるいは逆に更なる神聖化、また母性暗喩とした物語の定時によって、私たちの社会に提示され、受け入れられてきたことが確認された。これは冒頭に述べた 3 つの焦点、(1) 日本では本来は自殺を忌避していること、(2) 自殺が多い社会に適合するように、大衆文化を通して文化と心を相互構成してきた歴史があること、そして、(3) 自殺を許容する文化を有することで、自殺を促進するかあるいは自殺対策を抑制する効果がみられること、のうち (1) と (2) に関

わる知見といえるだろう。この検討を深めるためには、さらに異なるタイトルの分析が必要であり、現在、先に上げた山椒大夫や忠臣蔵の分析を試みている。これらを通して、再現構造分析とここで呼んだ分析方法について、さらに洗練することができるだろう。一方、自殺に向き合う文化と心の相互構成に迫るためには、③ディスコース分析の部分でさらに検討は可能であり、特に同時代の作品間での共通性についての検討や間テクスト性の検討、また個々の作品の背景にある社会文化的環境を合わせて検討することも有用であろう。

また、上記の焦点（3）に関しては、再現構造分析で見出された創意を取り出し、現在の私たちへの影響を評価する量的研究が可能である（Kawashima et al., 2020）。これについては、校を改めて紹介したい。

［参考文献］

角田光代、『曽根崎心中』、リトル・モア、2012 年
グッドマン・N、『芸術の言語』、慶應義塾大学出版会、2017 年
杉本博司、『この世の名残 夜も名残』、NHK エンタープライズ、2012 年
近松門左衛門、『曾根崎心中 冥途の飛脚 心中天の網島 現代語訳付き』、角川ソフィア書房、2007 年
Bantjes, J & Swartz, L., “The cultural turn in critical suicidology: What can we claim and what do we know?”, Death Studies, 41(8), 2017, pp.512-520.
Kawashima, D., Kawamoto, S., Shiraga, K., & Kawano, K. (2020). Is suicide beautiful? Suicide acceptance and related factors in Japan. Crisis: The Journal of Crisis Intervention and Suicide Prevention, 41(2), 114–120. https://doi.org/10.1027/0227-5910/a000612
Kim, U. & Berry, J.W., “Indigenous psychologies: Research and experience in cultural context”, SAGE Publications, 1993.
White, J., “We Belong: Life Promotion to Address Indigenous Suicide”, Discussion Paper, 2012. https://wisepractices.ca/wp-content/uploads/2017/12/White-Mushquash-2016-FINAL.pdf

Proposal for a representation structure analysis
— to consider the culture and mind in the face of suicide.

Kenji Kawano

Abstract:

How can we conceptualize and grasp the concept of suicide that is unique to Japanese culture? This paper proposes to analyze the variation and transition of creativity (devices applied by authors and directors to their works from time to time) in cultural products such as literary works that have been popular in Japan for a long time, in order to infer the mutually constitutive process of the mind and culture. The study focuses on the Sonezakishinju as its subject matter.